

信義と恩顧を貫いた武人

石田三成の真実



▲石田町会館前の像

石田三成公は長浜が生んだ英雄。没後四百年の今こそ、私たち長浜市民は、三成公の名譽を回復することを考えねばならない。そのためには、三成公のしいた善政と人柄と残した偉大な業績をより深く学び、再認識しなければならぬ。そこで本誌は今回、「三成公の名譽復権」にスポットをあてることにした。

悪の家康に対する正義の人物  
石田三成の人物像

作家・司馬遼太郎はその著「関ヶ原」で、巨大な力・徳川家康に立ち向かう正義の人間として三成を描いている。

折しも、NHKで放送中の大河ドラマ「葵・徳川三代」では、三成の忠義と正義がかなりリアルに描かれ、逆に徳川家康のずるさがうまくだく演出されているように思える。やがて、三成の人となりと生涯が正当に評価される時代になってきたのか、という気がする。が、日本人の意識の中における誤った「三成像」は、そう簡単に覆えるものではない。



▲残紅葉の句碑

作家・司馬遼太郎は三成を「不正を憎むことはなほだしく、行動の全てを正義か否かで判断した人物」だといひ、家康は一面では正義の擁護者をよそおいながら、ぬかりなく生き抜いた演技者だとみている。おそらくそうであつ

◆司馬遼太郎がみつめた実像

歴史は勝者によって綴られる。敗者の論理は徹底的に歪められることが多い。慶長五年（一六〇〇）の天下分け目の関ヶ原の合戦に敗れた西軍の将・石田三成はそのよい例だ。江戸幕府の開祖「神君」家康を持ち上げるために、幕府の御用史家によって三成像が貶められた結果が、今日もおお拭きされずに生き残っている。

「へいぐわい者（横柄人間）」「狡猾」「悪人」「冷血官僚」「虎の威を借る狐」「ずる賢い」「姦臣」「佞臣」など散々に言われてきた。

しかし、吉川英治や司馬遼太郎など数ある歴史作家は、三成に温い眼差しを寄せ、彼の功績について客観的な評価を与えてい

たにちがいない。

◆不正を許さぬ規律好き

また、「三成は、豊臣期の政治家としてはめずらしいタイプに属する。何が正義であるかということを考える観念がきわめてつよく（まるで江戸時代の教養人のように）、規律好きであり、その規律好きは、むしろ病的なほど、それも人にも押しつけ、不正があると検断者のような態度で糾弾し、同僚から極端にさらわれた。

彼の政敵であった浅野幸長なども、三成の死後「彼が死んでから大名たちの殿中での行儀が悪くなった」という意味のことを言っているが、とにかく、利害で離合集散する豊臣期の時代精神のなかにあって、正義とか、規

律とか、遵法とかいう、いわば形而上的なものに緊張し、昂奮する観念主義者がいたということ自体、きわだったことであると思われ「とも書かれている。

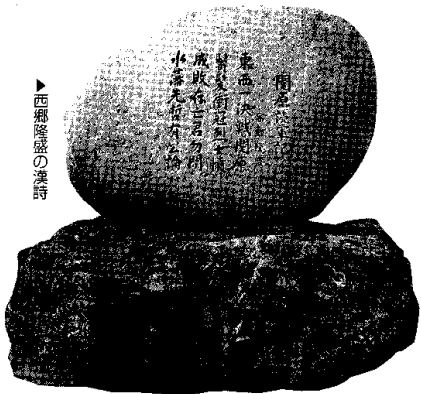
三成は、すぐれた経済技術者であり、財務家であり、文官派の頭領であり、行政官であり、見事なまでのプランメーカーであり、報恩信義を貫き通した文武の人だった。

◆最後の瞬間まで恩顧忘れず

家康の腹黒さに比し三成の清廉潔白さ、その節義、ゆえに人間の裏にひそむ欲望をよみとれなかつた。「秀頼のため」という大義名分で人が動くこと錯覚した。そして、最後まで豊臣の恩顧と理想に生き抜いた。

関ヶ原の合戦は、小早川秀秋の裏切りで形勢は逆転、西軍の八割が潰走し東軍が三成隊に集中していったとき、「俺は負けぬ。家康には名分がない。自分には豊臣家の防衛という巨大な名分がある。名分は一度や二度の敗戦で減じるものではない。死なずに「落ちる」。平家を倒して源家を再興させた頼朝を見よ」と司馬遼太郎は三成をしてこう語らせている。

戦さに破れ、三成は伊吹山中を古橋村へと向かう。古橋村は三成の母の里だったからという説もあるが、司馬遼太郎はこう描く。「三成は領民の顔を思い浮かべた。この内治（領内政治）熱心だった男は、十九万余石の領地の領民の顔を二割まで覚えていた。大名としては後世にいたるまで、この男ほど民治熱



▶西郷隆盛の遺詩

◆三成の民政とその業績

では、三成はどんな民政をしき、豊臣政権下でどんな業績をあげてきたのか。夫役への配慮、直訴の許可と百姓保護、検地による耕作者への権利保護、政策的な戸口調査（国勢調査）、石高制と租税体系の確立、兵農分離など、佐和山城主時代の三成の民政については後段の頁で詳述されている。

三成の提言によって始められたという説もある「大岡検地」、村落間の武力衝突から農

1 st. PLUS. 彦根市中央町 7-47 (0749-23-4176)

COMME des GARÇONS HOMME

ISSEY MIYAKE MEN

garantir COCUE

Y's

20471120

MASAKI MATSUSHIMA

SILVER'S INC.

株式会社 シルバース

▶法華寺三珠院のあったあたり



◆そのままに残る四季の彩り  
古橋の集落の東におだやかな山容を見せる

運ぶと、その通りのものが見られたのだという。とくに三成との縁が強まったのは、十年前。法華寺の過去帳が見つかったときだった。日ごとに亡くなった人の名前が列記される「霊界日鑑」という法華寺の常物のなかに、三成やその母、父、兄の名が載っていたそう。



▲たくさんの石像が残されている法華寺跡



▲石田賢さん



▲旧飯福寺参道の両側にのこる坊の跡

己高山(830m)は、奈良時代、法華寺、石道寺、鶏足寺、飯福寺などが創建され、一大仏教文化圏を形成していた。いまは廃寺となった諸寺の文化財は、ふもとの己高閣に収蔵されている。茶畑が続くまほろばの里の散策路を通り、飯福寺跡への参道を行く。両側のいくつもの坊跡は、何の面影も残さない。ただ道沿いに立ち並ぶ木々の彩りは、千余年前も四百年前も、そして今も変わってはいないだろう。法華寺跡は山の中腹になる。雪解け水の流れる川沿いの山道を上ると本堂のあったあたり。隆盛期には百余りの僧宇があり、己高山



▲もとの谷口の集落は杉木立のなか。そこに祠が祀られている

らに尾根を横断するよう西へ行くと、谷口の集落があった。あつた、というのは、明治二十年代に大水に襲われるまでのこと。現在の集落は、そこから七、八百メートル南麓にあるからだ。三成は、その一軒の家にかくまわれ

年ほど前に建て替えたもので、扉の奥には、丸い石が鎮座している。ところで、気になる短刀と月は、第二次大戦中、軍需用に供給するのは畏れ多いと村の神社に供えておいたところが、なくなってしまうという。それまでは、大切なものだからと下に降ろさず、家のなかの一番高い場所にして置かれていたそう。

杉林の道を奥へ進むと、途中から湖北町下山田へ出られ、さらに行くと木之本町高野へと続くという。ところが、地図上の道は途中で切

# 浅井町谷口から木之本町古橋へ 再起を信じて辿った山中の道

◆床下にかくまわれ、  
名字、家紋、刀を与える

姉川沿いの伊吹町吉槻から七曲峠を越え、さ

九月十五日、関ヶ原を出た石田三成は、伊吹山中で部下と別れたあと、谷口村(現浅井町谷口)と古橋村(現木之本町古橋)でかくまわれ、同月二十一日に捕縛されたという。彼が通った道をそのまま辿ろうと思ったが、取材時は雪の残る季節。足取りを追うのはまたの機会にして、立ち寄りた地を訪ねてみた。

たという。お札に与えられた名字「石田」姓を継ぐ石田賢さんにお話を聞いた。「以前集落のあったところを元屋敷と呼んでいるんですが、その寝間の床をめぐって三成さんをかくまったということです。お札にと刀と短刀を置いていかれ、石田姓と鳩八の家紋を与えられたと、母親から聞いています」

元屋敷は杉林のなか。家々のあった雰囲気はなんとなく残っている。石田家の敷地の一角には小さな祠がある。石田神社と呼んで、ここでずっと三成を祀ってきた。今の祠は二

## ◆古橋は母の生まれ故郷

子どもこのころの三成は、生まれた石田町に近い観音寺(山東町)の小姓で、鷹狩りの途中立ち寄りた羽柴秀吉に気の利いたお茶の出し方をして引き立てられた、というのが、秀吉との出会いの定説になっているが、その場所が古橋の法華寺、三珠院であったという説もある。古橋は三成の母親の生まれ在所でもある。同所で司法書士事務所を開く谷口實さんは、「三成が生まれた十年後に姉川の合戦があり、その後小谷城が落城しています。そんな不穏な状況に近い観音寺へ、子どもを小姓に出すでしょうか。また秀吉は長浜に城や新しい町をつくって忙しい。深山幽谷へ狩りに出かけたりにいられたでしょうか」と言う。

居城であった佐和山城には法華丸という出丸があるし、三成の「三」は三珠院の「三」ではないか、それらも考えあわせて法華寺説が唱えられている。

「祖父の先妻が三珠院の最後の住職の妹だったこともあって、小さいころからよく三成の話を開かされていました。祖父は「三成さんと親しげに呼んでいましたね」

そのころは特に気に止めていなかったが、長年離れていた故郷にもどった谷口さんは、町の文化財委員などをしていながら、三成に関わるものを見聞きする機会が増えた。お祖父さんの話を思い起こしながら現場に足を

の最有力寺院として浅井家、豊臣家、徳川家などの庇護を受けてきたという。何ヶ所かに石塔がまともめられているが、バラバラに散乱した石もあちこちに見られる。こんな重いものを盗っていく者があるらしい。今年はこのをきれいに整備して、ゆかりの人たちと一緒に供養したいと言う谷口さんだ。

「このあたりですよ、三珠院があったのは...」。行き場がなくなった三成は、自分をたまたま迎えてくれる場所はどこだ、訪ねたのだろう。その後、さらに山深い清水谷の右窟の中に身を隠すが、やがて追っ手に知れるところとなる。

京都六条河原に腰を据えたとき、彼の脳裏に浮かんだのは、秀吉の野望を支えてきたか。喧騒のなかにも華やかな日々だったろうか。緑深い古橋村の木々の匂い、風の音だったろうか。彼が最後にたどり着いた村は、今も穏やかな光景を残していた。

(蘭)



古戦場賤ヶ岳のふもと  
田園風景の静寂の中の  
旅の宿、味の店

日観連・JR協定  
料亭旅館  
想古亭 煎内

滋賀県伊香郡木之本町大倉1503-1  
TEL 0749-82-4127(F)  
FAX 0749-82-4888